建設アスベスト

被害の広がりが明らかに
鳴り止まぬ電話95件

12月25日、けんせつプラザ東京で、首都圏建設アスベスト訴訟弁護団・東京弁護団と東京土建本部労働対策部で、「建設アスベスト被害電話相談会」を実施しました。この取り組みは、東京1陣での国の賠償責任確定を受けて行なわれた12月23日の田村厚生労働大臣とアスベスト訴訟原告、弁護団らとの面談後の記者会見で急きょ発表したものです。

3陣提訴後の2020年3月25日に電話相談をした際には10本にも満たなかったことから通話があるのか心配されましたが、NHKニュースで報道されたこともあって、午前10時に回線をつなぐと4つの電話は一斉に鳴り出しました。その後も受話器を置くと10秒と間をあけずに次の電話がかかってくるという状態で、午後4時の終了まで続きました。15人の弁護士が交代で相談を受けましたが、「過労死110番の最初の時のような忙しさだった」という声がありました。

相談総数は95件でした。首都圏はもちろん、北海道、大阪、広島、鹿児島などと全国各地から問い合わせがありました。内容は、被災者の年齢は9割近くが60歳以上で、約4分の3が建設従事者。医師の診断の結果アスベスト性疾患だというにもかかわらず、労災申請に至っていないケースが目立ちました。12月15日の国の賠償責任確定の衝撃の大きさ、アスベスト被害の広がりの深刻さを確認する取り組みとなりました。

電話を受ける弁護団の皆さん。午前10時から6時間びっしり通話が途切れませんでした

東京地評

コロナに負けない
食料×生活支援

12月23日、東京地評、東京社保協、東京民医連の主催で、豊島区のラパスビル（東京労働会館）玄関前で「コロナに負けない！食料×生活支援プロジェクト」を行ないました。このプロジェクトを地域、学生寮へのチラシ配布、外国人コミュニティ、子ども食堂等への情報提供などで知らせました。

午前10時からのスタートでしたが、30分以上前から人が集まり始め、開始時には老若男女30人以上の行列ができました。訪れた人は白米、アルファ米、みかん、即席ラーメン、菓子などの食品ばかりでなく、ティッシュやラップなどの生活用品を決められた数の限度まで袋に入れて持ち帰っていました。暖かい味噌汁もふるまわれ、ラパスビルの地下では生活、医療の相談を専門家が対応しました。

豊島区在住の女性は「豊島区のひとり親世帯支援の方からこの催しを聞きました。私はシングルマザーで双子の子どもがいます。パートで賃金が低く、生活は苦しいです。朝食はパンだけという時もあります。こういう企画は助かります」と話してくれました。

主催者の集計では、受付したのは254人。女性が7割以上、同居の子どもある方は約50%、無職の方が55%という内訳でした。

会場のラパスビルの前には午前中に長い行列ができました

失業、貧困から救え
大久保公園で年越し相談村

年越し相談村の会場前で

【本部・佐藤正雄記】コロナ禍による経済の墜落による倒産・失業など、生業をなくし路頭に迷う人々を救おうと、新宿の大久保公園に、弁護士や労働組合有志による「年越し相談村」が開設されました。中心メンバーは、リーマンショック時の「日比谷年越し派遣村」に取り組んだ面々です。失業や住宅確保、生活保護など多岐にわたる相談を受け付け、行政の各種制度につなぐなど個別支援を行ない、急場をしのぐための義援金や食糧を配布するものです。

12月29、30日、1月2日の3日間で344件寄せられた相談は、リーマン時の「派遣村」を超えるペース、若者や女性、外国人労働者など広範な層から、深刻な相談が寄せられました。その中には建設従事者の姿も。20代後半の労働者は「造園の職人をしていたが仕事が全くなくなり現場を転々としたが、生活ができない」と話します。建築、解体などの従事者も相談に訪れ、建設業にも大きな危機が訪れていることを感じます。

取り組みには全労連・連合・全労協から350人が参加、本部長の棗一郎弁護士は「潮流の違いを超え、失業と貧困に苦しむ人々を救済する社会労働大運動を巻き起こそう」と強調。そして、政府が雇用を確保する失業対策事業に足を踏み出すべきと強く訴えました。

実行委員会の呼びかけに応じ、本部書記局2人、調布支部書記局からも2人が有志で参加しました。いのちと暮らしを守る社会労働運動、東京土建もその一翼を担う時であるとの思いを新たにしました。

山本晃さん（調布）談「調布支部所属の事業所で寮や宿舎を持ったところがあります。仕事相談、支援を、と思い立って参加し、相談村本部に申し入れましたが、あいにくうまくマッチングは叶いませんでした。実際に多くの方が生活に困窮し、相談に訪れる現状を見て、災禍は社会的弱者を襲うものと肌で感じる体験ができました」。

2020年最後の総がかり行動
感染対策厳しく批判

12月19日、2020年最後となる月例の「戦争させない、9条壊すな」総がかり行動が国会議員会館前で開かれ、集会途中で冷たい雨がパラつく中、800人の市民（東京土建からは63人）が参加しました。

主催者を代表して高田健さんは「感染拡大に無策の菅内閣は、学術会議任命拒否など学問の自由に対して攻撃し、自衛隊の敵基地攻撃能力の保有で東アジアの緊張を高めるなど憲法を破壊する企みを進めている。菅政権を退陣に追い込もう」などと話しました。

その後、市民からのアピールは4人が行ない、看護師の宮子あずささんは「医療崩壊を防ぐのは一人一人の自粛行動にかかっているとアナウンスされているが、コロナ以前に崩壊寸前だった。国の政策で、お年寄りの入院を受け入れると経営を圧迫するので敬遠するということが、東京ですら起こっている。医療崩壊は国の政策による問題だ」と厳しく批判しました。

江東女性の会

第五福竜丸展示館に折り鶴の「ひまわり」

安田事務局長（左端）に折り鶴の「ひまわり」を渡す女性の会の皆さん

【江東・書記・実川英治通信員】昨年、東京に緊急事態宣言が発令された春先、江東支部・女性の会でひとつの取り組みが静かにスタートしました。会員同士の大きな集まりができない状況の中、「何かできることは?」と思案した結果、役員と会員有志10人ほどが、自宅で「折り鶴」製作を始めました。

コツコツと何カ月間も製作を続け、集まったのは千羽を超える折り鶴たち。そして、集まった鶴をきれいに並べ替え、ようやく完成したのが色彩も鮮やかな『ひまわり』です。また、これを収める箱は深川中央分会のベテラン大工・越原信夫さんが作ってくれました。

12月6日、この折り鶴できた『ひまわり』を夢の島の都立第五福竜丸展示館に役員6人が平和への願いを込めて献納してきました。

核兵器の廃絶、そして戦争をしない・させない平和だけでなく、新型コロナウイルスに奪われてしまっている「日常的な平和を早く取り戻したい」という願いも、今はこの1羽1羽の鶴に込められているような気がします。

第五福竜丸の見学に訪れる機会があれば、女性の会が丹精込めて作製したこの立派な『ひまわり』も忘れずに、ぜひ一緒に見てきてください。

小野瀬さん

核兵器のない平和な世界に

献納の取り組みに参加した小野瀬有香さん（江東支部・女性の会会長）の談話「再び原水爆による被害が起こらないようにという願いを込めて建設されたこの第五福竜丸展示館。江東支部の諸先輩たちは、展示館建設のためには協力を惜しまなかったそうです。一日も早く核兵器のない平和な世界になってほしいと願ってます」。